

おもてなしの風土づくりはまず「あいさつ」から

通う心で

心を伝えれば、心で返ってくる——。こだまのように「通い合う心」が、おもてなしの風土を育てていきます。

日本一の取り組みへ

あいさつはコミュニケーションのはじまり。初めて会う人ともすんなり心を通わすことができ魔法のような言葉です。相手への思いやりの気持ちが伝わるあいさつは、かけたほうも清々しい気持ちになります。

相手に不快感を与えないルールが「マナー」ですが、「ホスピタリティ（おもてなしの心）」には、さらに「心」が加わります。人をおもてなす際には、やはり心を通わせることが大切。そんなとき「心伝わるあいさつ」ができれば、相手は思いやりの気持ちを受け止めることができます。

福智町では、そんな素敵なあいさつが日常になるよう「ホスピタリティあふれる町」を目指して



「あいさつがつくる ふれあい 心の輪」をテーマに、町内8か所の公共施設で「あいさつ日本一の町」を呼びかけています。

「日本一あいさつができる町」を目標に掲げ、本年度から広く呼びかけています。

あいさつが人と人をつなげ、家庭や地域でも信頼関係が深まり、やがて訪れる人への「おもてなしの心」を育てていく。言葉だけでなく心をのせて、投げかけた後に返ってくる「小さな喜び」

を日々かみしめられる町になれば、より心豊かな生活を送ることができそうです。

「おもてなしの風土づくり」の「一歩はまず「あいさつ」から。少しでも意識して、心伝わる「あいさつ」を投げかけてみてください。きつと、いつもと違う表情や喜びに出会えることでしょう。

「あいさつ日本一の町」を目指して

町

活性化に向けた「観光のまちづくり」が必要不可欠なのは、やはり「おもてなしの心」を共有することだと思っています。来町者への接し方が悪ければ、福智町の印象や観光資源の魅力もゼロになってしまいます。逆に、元気なあいさつや心通じ合うふれあいがあれば、観光目的だけでなく「福智の人」に会いに来ていただけます。わたしたちは同じ「物」を何度も見ようとは思いませんが、魅力ある「人」に出会えば、また会いたいと思うもの。そんな「おもてなしの風土」を培うため「心伝わるあいさつ」が浸透していくよう、これからも「日本一あいさつのできる町」を目指していきます。



浦田 弘二 町長

育まれていく風土

「おはようございます」。朝のおとずれを歓喜するように、元気な声が伊方小の校舎にこだまします。5月から「あいさつ日本一の学校」をテーマに取り組んでいる伊方小の「あいさつ運動」。児童会の5・6年生が、登校する一人ひとりとあいさつを交わします。

「当初は牽引しているつもりでしたが、今では子どもたちの元気に押されるほど。あいさつの力と成長の早さに驚かされます」と、井上憲治校長は校内の雰囲気の変化を実感していました。

一方で、地域からは「児童のあいさつに元気をもらった」とお礼の言葉が届けられ、その効果は校舎の外へも広がっています。

意識は「朝夕で変わるものではなく、風土は長い年月をかけて宿ります。「観光のまち」を目指して歩き始めたばかりの福智町にとって「おもてなしの心」の醸成は、息の長い取り組みになつていくでしょう。

人が「訪れてみたいまち」は、そこに住む人々にとっても「居心地のいいまち」であり「誇れるまち」。だからこそ「魅力あるまち」

6月に児童代表が「あいさつ日本一の学校」に向けた推進を町長室で宣言した伊方小。学校だけでなく保護者とも一体となって、取り組みを進めています。



を目指すことは、わたしたちの生活の豊かさにつながる、意義深く、価値ある取り組みです。

わたしたちが「観光地」をイメージしたとき、まるで福智とは別次元のような感覚を持ちますが、何も難しく考えることはなく、ただ一人ひとりが「おもてなし」の意識を少しずつ深め、身近な行動が習慣になれば、いつしか「おもてなしの風土」が育まれるはず。今日から、今からでも始めてみませんか。心通う「あいさつ」を…

特集 おもてなし おわり



校長先生にも元気に朝のあいさつ。目線と共に心の距離も近づきます。



福智の原風景、広谷地区からの眺め